

氏	名	李 基原
---	---	------

(論文内容の要旨)

本論文は、徂徠学が惹起した思想史的波紋とその意味を、日本国内だけでなく朝鮮も含めた言説空間において考察している。徂徠学に限らず近世儒者の著作は、朝鮮や中国でも読まれていた。しかし、これまで江戸儒学のインパクトを中国、朝鮮などの東アジア思想空間で論じた研究はほぼ皆無に近い。それはこれまで近世思想史研究が、日本内部の思想空間を前提にした「一国思想史」のなかで語られてきたことを意味している。本論文は、徂徠学がもたらしたインパクトを江戸儒学内で考えると共に、朝鮮儒学思想史に与えたインパクトも考察し、それによって「一国思想史」研究の現状を克服し、東アジア思想史を構想することをめざして、その展望を示している。

序論は、日本思想史及び徂徠学研究の研究史を検討し、その問題点を指摘するとともに、本論文の課題と方法を示している。とくに一国思想史を越えて東アジア思想史研究の必要性を強調している。

第一章では、徂徠学が明代の古文辞派の影響で形成されたことと、その意味を検討し、徂徠が言語に重点を置いた理由を明らかにしている。また徂徠の人間論を修己治人の枠でとらえることで、中国、朝鮮の朱子学が専ら修己中心に学問を構成しているのに対し、徂徠が治人中心に構成している点で際だった特徴があり、かつその意味を考察している。

第二・三章は、反徂徠学の登場を念頭に、徂徠高弟・太宰春台の学を「徂徠学の再構成」と見る立場から、徂徠学継承問題を検討している。とくに第二章では、春台が徂徠の古文辞学をいかに読み直しいかに再構成していったか、その理由とともに解明している。第三章は徂徠学の人間論の、春台による再構成を論じている。すなわち修己欠落・治人中心の徂徠の人間論の弱点を、外面的な礼による修己論を展開することで補完し、「徂徠学的人間」に確固たる土台を築いた論理の過程を解明している。

第四・五章は、当初徂徠学に吸引された多くの儒者が、反徂徠学へ転じていた意味を分析している。第四章は折衷学者片山兼山を取り上げた。当初徂徠学を修めた兼山が徂徠学批判に転じたきっかけが徂徠古文辞学の粗雑さへの疑問であることを明らかにし、兼山が古文辞学の方法を突き詰めて考証学を導入する過程を解明している。同時代に、兼山により学問のあり方が変わったと言われたが、それは兼山の残した膨大な経書注釈書の結果である。これは従来の思想史研究が見逃してきた点であり、徂徠古文辞学的経書解釈方法を克服して、文献考証学への転換点に、兼山の学問を位置づけている。

第五章は、徂徠学の人間論を再構成した春台への批判（反春台）とその意味を分析している。春台は『聖学問答』で、内面のあり方を問わないままに外的な礼に依拠する「徂徠的人間」像を明示してみせた。同書は激しい批判に曝されたが、それは、儒学的な自己形成のあり方を巡る根源的な問いに関

わる議論であった。春台の内面を問わない人間論は、逆に内面を律する人間形成の重要性を再確認させた意味があり、激しい春台批判を惹起したのである。その意味で春台批判は、寛政異学の禁で朱子学が復活してくる思想史の過程を必然化させたとも言える。つまり人間に本来的に善なる「本然の性」の内在を前提とした朱子学的人間論が、人間論の標準として再度登場してくることになったことを論じている。

第六章は、日本思想史の「外部」で議論された徂徠学像を、朝鮮の思想史、とくに丁若鏞の徂徠学との関連を分析している。丁若鏞は『論語』における「古言」「古語」の解明を通じて、聖人孔子の経旨および先王の道を見だし経世論を展開し、その学問的営為が朝鮮朱子学を解体に導き、四書注疏中心の経学から経中心の経学観へ朝鮮儒学を転換させた。この思想過程は、徂徠の古文辞学の学問方法を受容によって可能であったことを本章で解明している。他方、人間を社会を構成する集団的存在に即して意味づける徂徠の人間論の面では、丁若鏞は強い拒否感を持っていたことを明らかにしている。丁若鏞は、人間個々に責任ある主体性を認め、徂徠学的人間論と鋭く対立していた。この人間論の違いこそ、ある意味で朝鮮思想史と日本思想史の違いとして解釈できる。

結語では、本論の論点を徂徠以後の徂徠学が東アジア思想史に与えたインパクトという視点から再度まとめるとともに、徂徠学研究や日本思想史研究が、「一国思想史」を越えて、東アジア思想史の中で捉えなおされる必要性を強調している。一国に閉ざされ断絶的に区切られた思想体と見るのではなく、東アジアの思想の連動性に注目した東アジア思想史を構想する視点が重要である。それによって儒学をめぐる東アジア思想の比較史研究の可能性もより豊かに広がるはずである。本論文は、徂徠学を焦点にした朝・日間の思想的インパクトの一端を垣間見ただけに終わったが、これをさらに東アジア全体の思想空間に拡大することで、新たな東アジア思想史を構想していくことを課題として提示している。

(論文審査の結果の要旨)

18世紀前期の徂徠学の登場は、以後の思想と教育に強いインパクトをあたえた一種の「事件」であった。徂徠学は、18世紀半ば過ぎまで一世を風靡した後、儒学が教育世界に広く浸透していった18世紀後半期にいたって、逆に多くの批判をあび、急速に後退してゆき、やがて寛政異学の禁での朱子学復活に道を開くにいたった。本論文は、思想と教育に大きな波紋を巻き起こした徂徠学とは何であったのか、という問いを、徂徠学以後のこうした思想的展開のうちに問うことによって、多くの創見を提示している。なかでも以下の点において、とくに独創性が認められ、高く評価できる。

1) 思想史研究の方法論に関わって、これまでの多くの研究は、徂徠学の特質を、徂徠の思想著作から解釈学的にとらえて、徂徠という思想主体に還元する形でとらえてきた。これに対して本論文は、こうした方法論を排し、徂徠学をめぐる儒者たちの言説空間のうちに徂徠学の意味を読み解いている。

これは子安宣邦の思想史的方法論に学んでいるとはいえ、徂徠学の意味を、その後継者の太宰春台およびそれに対する反徂徠・反春台の思想的言説空間、さらに朝鮮儒者の言説空間の広がりにおいて、検討している。この点で、徂徠をめぐる言説空間にとどまった子安の研究を越え出たものと評価できる。

2) 本論文は、これまで思想史的评价が定まらなかった太宰春台の思想史的研究に、先行研究水準を大きく越えた、創見に富む成果をあげている。春台による古文辞学(学問・学習の方法論)と春台の人間論の構成が、徂徠と微妙なずれを生じていることを的確に見だし、そのずれの意味を、反徂徠という言説空間の中で捉えなおすことで、春台の学が、時代変化に対応した徂徠学の再構成であることを明らかにし、結局春台の学は「徂徠の禦侮」であったと結論づけている。きわめて説得力のある創見で、以後の春台研究には参照不可欠の成果といえる。

3) 反徂徠の思想言説に関する先行研究はすでに見られるが、春台の『聖学問答』への感情的なまでの強い反撥、すなわち「反春台」言説に関する思想史研究は、本研究によって初めて拓かれた。すなわち心の自律性を否定し外部規範たる「礼」にもとづく人間形成を説く「徂徠的人間論」の春台による徹底化が、逆に人の心の根源性の意識を覚醒させ、朱子学復活への導火線となったとする。この論証は鮮やかである。さらにこれまで適切に評価されてこなかった折衷学の片山兼山の膨大な経書注釈作業が、徂徠古文辞学の不十分さを徹底していったものと意味づけ、次の考証学が開かれてくる前提をなしたと論じている。これにより、徂徠の古文辞学という方法と「徂徠的人間

論」の系譜を、徂徠学以後の言説空間に明確に見いだし、その教育思想史的意味づけに成功している。

4) 本論文の最大の成果は、朝鮮儒学の思想空間に徂徠学のインパクトがいかに及んだかを解明した点である。強固な朝鮮朱子学体系を解体に導いた大儒丁若鏞が、朝鮮実学を開く過程の中で徂徠学を受容しかつ反撥した諸相を、『論語』注釈の具体例に即して実証的思想史的に解明した。丁若鏞が徂徠学の影響を受けたという事実の指摘はこれまでもなされているが、主著の『論語』注釈に即して思想内容に踏み込んで、徂徠学の何がいかに影響したかを解明したのは、日本と朝鮮の思想史研究において初の試みであり、画期的成果といえる。

5) 朝鮮の思想空間における徂徠学を視野に入れることで、本論文は、これまで無自覚なまま一国単位で思想を捉えてきた日本思想史研究に、根本的な問題提起をなした。つまり近代国民国家を反映したこれまでの一国思想史のあり方を批判し、相互に思想的に影響し合うなかで展開していた東アジア思想史のあり方を想定し、その視野から日本思想史を意味づける必要性を論じている。それは、これまで思想の受容史として語られてきた思想の交流史研究を明確に批判して、新たな東アジア思想交流史研究に道を拓こうとした意欲に満ちた議論となっている。

6) 本論文は、高瀬学山、久田犁、木貫州など、生没年も定かでない無名儒者の写本や版本を発掘して読み込み、論争的な言説空間を描き出すことに努力している点でも評価される。また本研究は、『論語』等の経書注釈書の漢籍漢文を膨大な時間をかけて丹念に読み込んでいく根気強い努力を基礎にしている。議論的なテキストだけで手軽に議論を構成して済ませる研究が多くなっている中で、本論文は、地道な資料収集とその緻密な解読にもとづく手堅い実証研究となっている点で特筆に値する。

以上、本論文は確かに創見に満ちた力作であるが、審査の過程で以下の問題点が明らかになった。第一に、東アジア思想史に向けた構想は確かに評価できるが、本論文が明らかにしたのは、朝鮮実学派儒者丁若鏞との関連にとどまっている。他の朝鮮や中国の思想空間における徂徠学の行方はいまだ着手されていないままであること。第二に、本研究が解明した地平からすれば、丸山真男や子安宣邦らの方法論と問題構成に批判を加えて、本研究の意義をさらに積極的に主張できると思われること。第三に、徂徠学的人間論の社会的基礎やその系譜的意味づけなどが未解明であり、また折衷学と考証学との関係についても明解とは言えないこと。しかしこれらは、事後的に見いだされ問題点であり、今後の研究の中で解決されるものと認められるものであり、本論文が達成したすぐれた学術的価値を損なうものとはいえない。この点で

審査委員の意見は一致した。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。
また平成21年2月18日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、
合格と認めた。